

本学における授業「グループダイナミクス」の必要性とその意義 第2報 —ファシリテーターの影響による学生の「グループダイナミクス」の学びの変化—

森谷弥生, 久松美佐子, 前田則子, 高平百合子

要 旨

本研究は、本学の「グループダイナミクス」という授業においてファシリテーターの影響による学生の学びの変化に関して分析したものである。調査の対象は平成18年度～21年度の本学看護学科2年次生である。調査方法は、アンケート調査及び事後レポートによる。分析方法は、教員がファシリテーターをしていた平成18年度、19年度と、外部講師を増員し教員とペアを組んで行った平成20年度、21年度を比較しながら、量的・質的に行った。

その結果、平成18年度、19年度の学生は、平成20年度、21年度の学生と比較して、学生の目的達成度、満足度および合宿の意味の度合いにおいて量的にはやや高い値を示していた。しかしながら、事後レポートの内容は、自己の目標到達や満足にとどまっていた。対照的に、平成20年度、21年度における学生の事後レポートの内容は、自己理解のみにとどまらず、他者理解や対人関係の深まり、セッションを通して他者との対話、対決、受容等を体験したなかから信頼関係を構築し、人と人との関係の重要性に気づくことができたという、目的・目標の深まりを示す記述が多かった。

このことから、トレーニングを積んだファシリテーターのその場面をとらえた効果的な介入により、学生が人間関係を深める学びをより多くし、その関係づくりの深さを知るほどに難しさを知り、目的の達成とは何か?を探索するようになったと考える。

したがって、さらに深みのある関わりや学生の成長を促進するために教員がファシリテーターとしてのトレーニングを積み重ねたり、学生が自己を振り返り目的達成に近づけるように合宿日程にゆとりをもたせることが大切である。また、「グループダイナミクス」の学びを、その後の学内授業や実習などの機会を通して看護に生かせるようフォローしていくことが必要である。

キーワード：グループダイナミクス、人間関係の学び、ファシリテーター、看護学生

I. はじめに

本学では、開学当初から看護学生のために「グループダイナミクス」という合宿授業をカリキュラムの中に取り入れている。「グループダイナミクス」とは、人間関係の複雑な構図をグループの中で直接体験し、グループメンバーとコミュニケーションを密に行う中で人間理解を深め自己の成長を図る科目である。人間を対象とする看護においては、知識や技術の習得のみでなく、ひとを1人の人間として総合的に捉えるための人間理解は不可欠である。そのため、2泊3日の合宿を通したグループ体験の中で、より深い関わりを求めて人間理解を深め、さまざまな人間関係を学ぶことは有意義なことと考える。平成6年に開学し、入学した第一期生より看護学科3年次生を対象に行われていたこの「グループダイナミクス」の授業は、平成18年度のカリキュラム改正より2年次生を対象に実施されるようになった。また、参加者の学習を促進する役割を担うファシリテーターとしてグループダイナミクス専門の外部講師1名に加え、本学教員が各グループに1～2名ずつ配置

されていたが、平成20年度、平成21年度は4名の外部講師を招いて、外部講師と本学教員や本学教員同士がペアを組み、各グループのファシリテーター役を担っている。

そこで今回、2年次生を対象として実施されるようになった平成18年度から平成21年度までの4年間を振り返り、ファシリテーターの影響による学生の体験学習の学びの変化を明らかにし、今後の「グループダイナミクス」に生かせるよう検討することとした。

II. 本学におけるグループダイナミクスの概要

1. 目的

より深い関わりを求めて、“今ここ”に生きることによって、さまざまな人間関係（対話・対決・受容・信頼・影響関係）をグループの中で直接体験として学ぶ。

2. 目標

- 1) 自分をも含めた一人一人により深く気づく。
- 2) お互いの影響関係に、より深く気づく。
- 3) 気づきとフィードバックを活用して共に学びあう。
- 4) グループの成長過程に目を向ける。
- 5) グループの中で起こる中身や結果だけでなく、プ

表1 平成21年度 グループダイナミックス日程

10月27日(火)

時間	内容
14:40~16:10	グループダイナミックス課題学習
16:20~17:50	グループダイナミックス振り返り

11月5日(木)

時間	内容
8:50	集合
9:00~9:50	出発>>>到着
10:00~10:10	開会式
10:10~12:10	全体セッション①
12:10~13:00	昼食
13:00~14:20	グループセッション①
14:20~14:40	休憩
14:40~16:00	グループセッション②
16:00~16:20	各自の部屋へ移動
16:20~17:40	グループセッション③
17:40~19:20	夕食・入浴
19:20~20:30	グループセッション④
20:30~20:40	移動
20:40~21:00	メディテーション
21:00~22:30	学生: 入浴・就寝準備 教員: スタッフミーティング
22:30~	就寝

11月6日(金)

時間	内容
6:30	起床
7:30~8:30	朝食
8:40~10:30	全体セッション②
10:30~10:40	休憩
10:40~12:00	グループセッション⑤
12:00~13:00	昼食
13:00~14:20	グループセッション⑥
14:20~14:30	休憩
14:30~15:50	グループセッション⑦
15:50~16:10	休憩
16:10~18:30	全体セッション③
18:30~19:50	夕食・入浴
19:50~21:00	グループセッション⑧
21:00~21:10	移動
21:10~21:30	メディテーション
21:30~22:30	学生: 入浴・就寝準備 教員: スタッフミーティング
22:30~	就寝

11月7日(土)

時間	内容
6:30	起床
7:30~8:30	朝食
8:30~8:40	移動
8:40~10:00	グループセッション⑨
10:00~10:10	休憩・移動
10:10~11:50	全体セッション④
11:50~12:00	開会式

12月11日(金)

時間	内容
16:20~17:50	グループダイナミックス事後フォロー

ロセスに目を向ける。

3. 2年次における合宿のねらい

- 1) 作られた集団の中での関わりを通して、人間関係、役割関係を体験することで、お互いに影響を与え合う自分と他者に気づく。
 - 2) 普段の親しい関係から離れて、新たな集団の中であらためて自分の価値観を見つめ直し、自分のアイデンティティの確立へとつなげる。
 - 3) 人の前で自分の素直な気持ちを出したり、相手の気持ちを受け取ることによって、より深い理解、共感を味わう機会とする。
 - 4) 今後どのような集団の中にあっても様々な人間関係に役立てられる。
4. プログラムの概要 (表1, 表2) (写真1, 2, 3, 4)
- 1) 事前オリエンテーション：合宿1~2週間前に、学生はグループダイナミックスについての目的や概要の説明をうけ、合宿に向けての自己の気持ちを整理する。
 - 2) 全体セッション：決められた時間内にある課題をグループごとに実行していく。一堂に会して行う。
 - 3) グループセッション：決められた時間にグループごとの個室で行う。構成法と非構成法があり、課題が提示された構成法と特に課題はない非構成法がある。非構成法ではファシリテーターは指示も誘導も一切しない。
 - 4) メディテーション：一日の終わりに20分間、共

に集い、その日一日を静かに振り返る。ろうそくの灯、音楽や詩に包まれ、自分の気持ちに向かいあうときである。

- 5) スタッフミーティング：一日のプログラムが終了した後に教員と外部講師で行う。その日の振り返りや気になる学生、困っていること、翌日のプログラムの内容についての意見交換の場としている。
- 6) 事後フォロー：合宿の2~3週間後に、演習中にグループで起こったことについて、グループセッションのふりかえり用紙をグラフ化したものや各セッションを形容詞であらわした一覧表等を使用し振り返り、自分の体験の明確化と意味を深める。

III. 研究方法

1. 対象

平成18年度~21年度の看護学科2年次生で、「グループダイナミックス」の授業を受講した者を対象とした。

2. 調査方法

表2 グループダイナミクス年度別プログラム概要

	第11回(2006年)	第12回(2007年)	第13回(2008年)	第14回(2009年)
日程	後期の11月 11/9(木)~11/11(土)	後期の10月 10/31(水)~11/2(金)	後期の11月 11/6(木)~11/8(土)	後期の11月 11/5(木)~11/7(土)
場所	グランビュアあくね	グランビュアあくね	グランビュアあくね	いこいの村いむた池
全体セッション ①~④	科目担当者と外部講師が 各セッション毎に実施	外部講師1名が実施した	外部講師が各セッション毎に実施	外部講師が各セッション毎に実施
内容	①おもしろ村(120分) ②ペア・インタビュー (110分) ③オブジェ作り(150分) ④私の旗づくり(100分)	①おもしろ村(120分) ②ペア・インタビュー (90分) ③オブジェ作り(120分) ④私の旗づくり(90分)	①おもしろ村(120分) ②ペア・インタビュー(110分) ③オブジェ作り(140分) ④私の旗づくり(100分)	①おもしろ村(120分) ②ペア・インタビュー(110分) ③オブジェ作り(140分) ④私の旗づくり(100分)
グループセッ ション①~⑨ (ふりかえりを 含む)	1日目構成セッション①私の地 図作り160分、 構成セッション②若い女性と 水夫140分 2日目非構成セッション①~③ 80分、④70分 3日目非構成セッション⑤80分	1日目 ①70分 ②80分 2日目 ③~⑥80分 3日目 ⑦~⑨80分	1日目 ①~③80分 ④70分 2日目 ⑤~⑦80分 ⑧70分 3日目 ⑨80分	1日目 ①~③80分 ④70分 2日目 ⑤~⑦80分 ⑧70分 3日目 ⑨80分 ⑩「私の窓」を実施
メディテーション	全体 音楽 詩の朗読 その日1日を静かに 振り返る	全体 音楽 詩の朗読 その日1日を静かに 振り返る	全体 音楽 詩の朗読 その日1日を静かに振り返る	全体 音楽 詩の朗読 その日1日を静かに振り返る
グループ編成	1グループ: 8名 2~5グループ: 9名 計44名	1~7グループ: 8名 計56名	1~4グループ: 9名 5グループ: 10名 6グループ: 9名 計55名	1~6グループ: 8名 計48名
ファシリテーター	1~5グループ: 教員1名 全体セッションと構成セッションは 外部講師と科目担当者が 担当した。	1グループ: 教員2名 2~7グループ: 教員1名 全体セッションは外部講師 が担当した。	1グループ: 外部講師1名+教員1名 2グループ: 外部講師1名+教員1名 3グループ: 外部講師1名+教員1名 4グループ: 外部講師1名+教員1名 5グループ: 教員+教員(マネージャー) 6グループ: 教員+教員(マネージャー)	1グループ: 教員1名 2グループ: 教員2名 3グループ: 外部講師1名+教員1名 4グループ: 外部講師1名+教員1名 5グループ: 外部講師1名+教員1名 6グループ: 外部講師



写真1 オブジェ作りの1コマ(1)



写真3 メディテーションの風景



写真2 オブジェ作りの1コマ(2)

本調査は自記式の質問調査票「グループダイナミクス合宿アンケート」を使用し、体験学習終了後に協力が得られた学生に記入してもらった。また、合宿を終了して2週間後までの課題である「グループダイナミクス

を終えて」のレポートを回収した。

3. 分析方法

1) アンケートにおいて、学生が合宿のねらいや目的、満足度、合宿の意味についての達成度の度合いを、エクセルを用いて分析した。

①合宿のねらいの達成度については、「1.未達成~6.十分に達成」の6段階で評定を求めた。得られた回答のうち、1~3を選択したものを未達成、4~6を選択したものを達成と2項目に分類し、集計した割合(%)から分析を行った。

②合宿に対する満足度については、「1.非常に不満~6.非常に満足」の6段階で評定を求めた。得られた回答のうち、1~3を選択したものを不満足、4~6を選択したものを満足と2項目に分類し、集計した割合(%)から分析を行った。

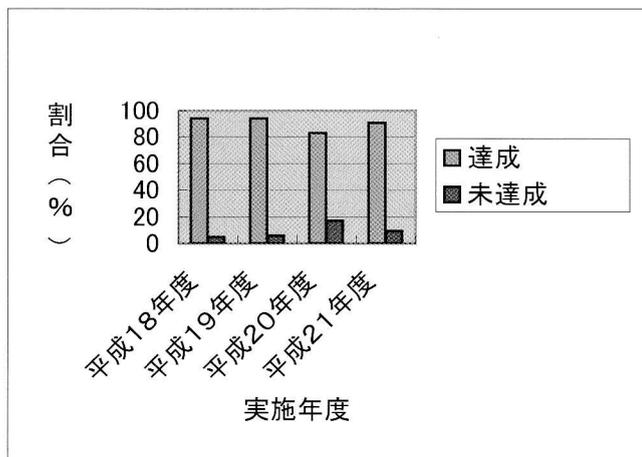


図1 合宿のねらいの達成度

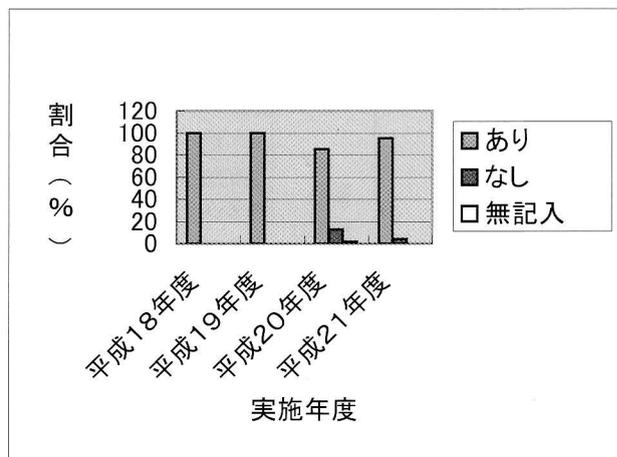


図3 あなたにとっての合宿の意味

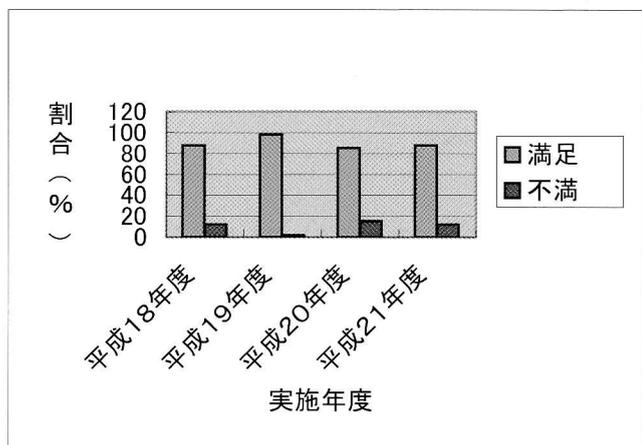


図2 合宿の満足度

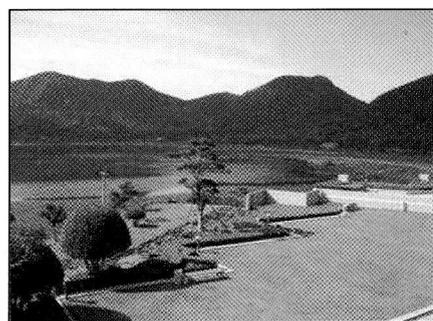


写真4 いこいの村いむた池

18年度、平成19年度では94%の学生が達成されたと回答し、平成20年度は83%、平成21年度は91%の学生が達成されたと回答していた。(図1)

学生の合宿に対する満足度では、平成18年度は95%、平成19年度は98%の学生が満足と回答し、平成20年度は85%、平成21年度では88%の学生が満足と回答していた。(図2)

学生にとっての合宿の意味についての設問では、平成18年度、平成19年度は100%の学生が「意味があった」と回答し、平成20年度は85%、平成21年度では95%の学生が「意味があった」と回答していた。(図3)

3. 学生の合宿のねらいや目的の達成、合宿の意味の内容

年度ごとに、学生が合宿のねらいや目的の達成、合宿の意味について具体的に記載した内容を分析した結果、いくつかのカテゴリーが抽出された。そのカテゴリーを比較した結果、以下のように平成18年度、19年度と、平成20年度、21年度ではカテゴリーにいくつかの違いがみられた。違いがみられたカテゴリーについて、その内容を述べる。(表3) 以下カテゴリーを【】で記載例をくゝで示す。

1) 他者に関して

他者に関しての追加項目で、平成20年度、21年度

- ③自分にとっての合宿の意味の程度については、「1. 全くなし～6. 大変あり」の6段階で評定を求めた。得られた回答のうち、1～3を選択したものを「なし」、4～6を選択したものを「あり」として2項目に分類し、集計した割合(%)から分析を行った。
- 2) 自由記載したその具体的内容を質的に分析し、年度別に比較した。
- 3) レポートにおいて上記の分析の意味を裏付ける具体例を抽出した。

IV. 結 果

1. 研究参加者の概要

アンケートに協力が得られた学生数は、平成18年42名(回収率95%)、平成19年度54名(回収率96%)、平成20年度54名(回収率98%)、平成21年度42名(86%)であった。なお、対象数の差は、欠損値として処理した。

2. 学生の合宿のねらいや目的、満足度、合宿の意味についての達成度の割合

学生の合宿のねらいや目的の達成度については、平成

表3 合宿のねらいや目的達成、合宿の意味

	カテゴリー（平成18年度、19年度）	カテゴリー（平成20年度、21年度）
他者に関して	他者の考えや思いを聴く 相手を受け入れる 他者の意見に共感 他者の新たな一面の発見 聴くことの難しさを実感	他者の考えや思いを聴く 相手を受け入れる 他者の意見に共感 他者の新たな一面の発見 聴くことの難しさを実感 他者のことを深く考える 他者から温かさや思いやりの受け取り
自分にに関して	自分の考えや気持ちを表出できる 新たな自分の発見 自分の考えの変化 知識や思いを豊かにし視野が広がる 自己価値の見直し 自分を出し切れない	自分の考えや気持ちを表出できる 新たな自分の発見 自分の考えの変化 知識や思いを豊かにし視野が広がる 自己価値の見直し 自分を出し切れない
グループとして	信頼関係の深まり 他者との関わり方の学び 相互作用を体感 コミュニケーションのズレを認識	信頼関係の深まり 他者との関わり方の学び 相互作用を体感 目的達成の意味の探索

のみに見られたカテゴリーには、【他者のことを深く考える】と【他者から温かさや思いやりの受け取り】の2つがあった。

【他者のことを深く考える】では、＜表面にとらわれず、他者の考えを少し深く考えるようになった＞など、他者の言動の中にある意味にまで目を向けて考えるようになったという意見があった。また、【他者から温かさや思いやりの受け取り】では、＜みんなの思いやりや温かさを感じた＞や＜みんなの聴く姿勢も雰囲気も温かいものを感じ自分らしく自分の意見を表出できた＞など、他者からのフィードバックを感じ取ることでさらに自己開示が促進していた。

2) グループとして

グループとしての項目で、平成18年度、19年度のみで抽出されたカテゴリーには【コミュニケーションのズレの認識】があり、平成20年度、21年度のみに見られたカテゴリーには【目的達成の意味の探索】があった。

平成18年度、19年度の【コミュニケーションのズレの認識】では、＜コミュニケーションが一方通行になることが多かった＞や＜もっと上手な問いかけや聴き方が出来ればよかった＞など、お互いがかみ合っていない体験をしていた。一方、平成20年度、21年度の【目的達成の意味の探索】では、＜目的達成とは何なのか分からない時もあった。その目的を模索するのも良い学びとなった＞や＜達成するにはどのように取り組めばいいのかつかめなかった＞＜自分の中では満足だが、グループとしては一番上の達成とはいえないかもしれない

＞など、目的達成を常に意識し個人としての達成のみでなくグループとしての目的達成まで目指して探索する意見がでていた。

4. 平成21年度の「グループダイナミクスを終えて」のレポートより

学生のレポートより、外部講師や本学教員の影響や課題達成について記述されたものをいくつか取り上げた。

- ・「先生（外部講師）の「今の状況が続いて本当に相手のことが分かるかな？」という言葉に胸にとめて考えたおかげでその後のグループの雰囲気が変わった。この一言がなかったら、相手への関心、思いやりというものは生まれていなかっただろう。」
- ・「ファシリテーターの「みんな〇〇さんの話に戻した？」という言葉で、質問や疑問、話題などにきちんと返答（応答）できていただろうか？ということに気づかされた。」
- ・「きちんと受け止め、返答（応答）する事を繰り返すことで少しずつ人間関係が築かれるのではないかと思う。個人であれグループであれ、その人個人を受け止め、真剣に考え、答えられるように成長していきたい。」
- ・「理解とは、今までは“言葉を理解する”という感覚に近い感覚だった。本当に理解するというのは、“受け止める”ということだと感じた。今回、感覚としてしかつかめなかったけれど、この体験や感覚で得たことをもっと養い、これからの人間関係や看護の場面で生かしていきたい。」

V. 考 察

今回、ファシリテーターの影響による学生の「グループダイナミックス」の学びの変化を明らかにするために調査を行った。学生の目的達成度や満足、合宿の意味の度合いを見てみると、平成18年度、19年度の方が、量的にはやや高値を示していたが、事後レポートの内容は、自己の目標到達や満足にとどまっていた。しかし、平成20年度、21年度における学生の事後レポートの内容は、自己理解のみにとどまらず、他者理解や対人関係の深まり、セッションを通して他者との対話、対決、受容等を体験したなかから信頼関係を構築し、人と人との関係の重要さに気づくことができたという、目的・目標の深まりを示す記述が多かった。これは、「先生の…この一言がなかったら、相手への関心、思いやりというものには生まれていなかっただろう。」などの学生レポートの記述からも分かるように、平成20年度から増員された外部講師とトレーニングを積んできた教員の介入の影響が大きいと考える。このことは、平成18年度、19年度の学生の「コミュニケーションが一方通行になることが多かった」>「やくもっと上手な問いかけや聴き方が出来ればよかった」などの、【コミュニケーションのズレを認識】した体験の記述からも裏付けられる。津村らは、ファシリテーターとして大切なことは、学習者一人ひとりを尊重し学習者の成長を促進することと述べている¹⁾。平成20年度、21年度の「学生の合宿のねらいや目的の達成、合宿の意味の内容」のカテゴリーにおいて、【他者のことを深く考える】と【他者から温かさや思いやりの受け取り】の2つが新たに抽出された。また記述の中に、「ファシリテーターの「みんな〇〇さんの話に戻した?」という言葉で、質問や疑問、話題などにきちんと返答(応答)できていたかどうか?ということに気づかされた。」などの意見もみられた。このような結果は、ファシリテーターが学生一人ひとりを尊重し、その場面を捉えた効果的な介入をして、学生の成長を促していたからでできたものと考えられる。それを受けて学生は、自分や他者をより深く観察し、他者の話を心でしっかり受け止め、フィードバックし、お互いを理解し合いながら関係を深める学びをしていたといえる。そのような体験を通して、学生は人間関係づくりの深さを知るほどに難しさを知り、目的の達成とは何か?を探索するようになったといえよう。

今後「グループダイナミックス」において、さらに深

みのある関わりや学生の成長を促進するためには、教員がファシリテーターとしてトレーニングを積み重ねると共に、学生が充分語り合えたり一人で振り返ったりして目的達成に近づけるように、グループセッションの時間配分やゆとりのある日程に調整していくことが大切と考える。星野は、体験学習という方法は日常生活の場でそのまま活用できるし、またそうしなければ、価値が薄くなると述べている²⁾。また長谷川は、チームワーク、リーダーシップ、グループマネジメント、接遇マナーなどと、多様な対人関係能力が看護師には求められていると述べている³⁾。ゆえに、人間関係づくりの学びというグループダイナミックスを通して、人間関係能力の向上だけでなく、個人のひととしての成長も促す効果があると考える。したがって、「グループダイナミックス」の学びを合宿だけのものとせず、継続して一人の人間としてまた看護師として生かしていけるよう、その後の学内授業や演習、臨地実習などの機会を通して教員がフォローしていくことが必要である。

今回の研究は、4年間を通して看護学科2年次生を対象に行った。そのため、各年次による学生個人や集団での特徴に違いがあり、今回の研究結果を一概に比較することは難しい面がある。また、グループダイナミックスを通しての人的成長は、時間的経過を要するため、この合宿の意義を見ていくには合宿後の学生の変化を追って研究していく必要がある。

参考・引用文献

- 1) 津村俊充, 山口真人: 人間関係トレーニング, 私を育てる教育への人間学的アプローチ, 初版, ナカニシヤ出版, 京都, 1992
- 2) 星野欣生: 人間関係づくりトレーニング, 初版, 金子書房, 東京, 2003
- 3) 原田慶子, 岩田朗子: エンカウンター・グループが看護学生の自己理解に影響をおよぼす要因, 長野県看護大学紀要, 9: 29-35, 2007
- 4) 星野欣生: 職場の人間関係づくりトレーニング, 初版, 金子書房, 東京, 2007
- 5) 長谷川 浩: 系統看護学講座 基礎分野 人間関係論, 第2版, 医学書院, 東京, 2009
- 6) 吉田 道雄: 人間関係のグループ・ダイナミックス, 初版, ナカニシヤ出版, 2002

The necessity and significance of the training called Group Dynamics :
The change of study between the students
caused by facilitator and the training called Group Dynamics

Yayoi Moritani, Misako Hisamatsu, Noriko Maeda, Yuriko Takahira

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : group dynamics, human relations, facilitator, nursing student

Abstract

This study tried to analyze the change of study between the students caused by facilitator and the training called 'Group Dynamics' . This survey covered the second year student of Kagoshima Immaculate Heart University from 2006 to 2009. The method of investigation is based on questionnaires and reports which they submitted after the workshops. It compares the students in 2006/07 and the students in 2008/09 from a quantitative and qualitative standpoint.

As a result of this analysis, compared to the students in 2008/09, students in 2006/07 reaches higher level understanding rather than the level of students in 2008/09. However, the levels of the reports were not enough. For instance, they just wrote about self-satisfaction and own purpose on reports. On the contrary, the most of the students in 2008 and 2009 write reports which indicates that deeping of the purpose of students as follows: Deeping of the understanding of other people and human relations, Building relationship through the secession, Notification of significance of human relations.

It can conclude that an appropriate and effective interruption by a well trained facilitator helps students to study human relationships deeply. As a consequence, this deep understanding about human relationships makes them understand the difficulties to build human relationships and try to think 'What it achievement of the goals?

Therefore, in order to improve involvements and growths of students, it is significant that the teachers gain facilitator' s experience and rig students' schedule to look back on their experience for themselves. Moreover, it is necessary that the teachers follow students learning from the training, 'Group Dynamics' so that the students utilize this experience for the subsequent lectures and nursing practices.
